

給特改正案法は、 長時間労働の見直しになっていない

このまま進めば

水面下にもぐった形の現場での対応が行われる

結果として

教員不足が恒常化する

清水睦美（日本女子大学）

新卒者の教職離れへの懸念：学校の先生になった感じがしない！

長時間労働への対応としての無理な働き方改革の結果

→教員の業務が細分化している →新卒で担任をもたせてもらえない（※新卒に負荷をかけない配慮？）

算数専科＋校務分掌（給食関連業務）：

新卒のため意味がわからない給食関連業務を担当することになったが、間違いが許されないムードがあり緊張する。

それが優先されて、授業準備ができない。

先生になったはずなのに、子ども生活に関われずに、事務仕事をしている感じがする毎日。

特別支援教室の巡回指導員：

新卒で子どもの生活全般がわからず、在籍学級担任の指示に疑問があっても聞いたりできない。

学校の先生になったという感じがあまりせず、塾で個別指導をしているように感じる毎日。

遠のくマイノリティ支援：「勉強しなきゃ」と思っているけど、決まった業務を終わらせないと学校内でうく！

長時間労働への対応としての無理な働き方改革の結果

→マイノリティの子どもへの理解が進まなくなっている

学校単位・自治体単位で講演に呼ばれる回数が明らかに減りました。。。。

研修会への参加者の多く（国際教室や特別支援教育担当者）は、非常勤や支援員に代わっているのですが、学校の先生の無理解をなげく傾向が顕著になっています。

「すべての教師が特別支援教育に関わる」から「調整額を減らす」という文科相の理屈????

「新たな職」の前に、正規雇用の教員を増やすことはできるはず。そこをまじめに考えてほしい

例・外国籍の子どもたちが日本の大学で教職課程を経て、日本の国家資格である教員免許状を取得して教員になっているにもかかわらず、

「新たな職」の適用外になる自治体が多い。

・教員免許をもって学習指導をしているのに、「加配」による教員増のために、県費負担か私費負担かなどでさまざまな職があり給与水準も異なる。

「インクルーシブ」といいながら実態は逆行運用の問題ではなく制度の問題